

- * 「兄弟たち。私を見ならう者になってください。」（ピリピ3：17）パウロの自信に満ちたことばであるが、パウロは自分が完璧だからこう言っているのではない。「私は罪人のかしらです。」と言う位弱い自分を認識していた。
I コリント
11：1に「私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。」とあるように、信仰生活の最高のお手本はイエス・キリストである。この方を見ならって私はひたすら歩んで来た。だから、私を見てくれば、キリストの姿がその一部でも見えるだろう、とパウロはいうのである。
- * もう一つ、私を見ならえという根拠は、教会内に絶対に見ならってはいけないクリスチャンがいたからである。一つはユダヤ教的クリスチャン。彼らはイエスを信じるようにはなったが、古いユダヤ教の律法や慣習を守らなければ、特に割礼のない者は救われないという間違った考えで教会に悪い影響を与えていた。もう一つはこの世的クリスチャン。「彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。」（3：19）「欲望」と訳されている者のことばの意味は「腹」。腹を満たすこと、食べることに代表されるようにこの世のことばのみ関心がいつているクリスチャン。「彼らの行く先は滅びです。」と厳しいが、現在の私たちに対しても言われている。
- * 「けれども、私たちの国籍は天にあります。」キリストに従順なクリスチャンの行き先は天国であると言う。ピリピの人たちは当時支配していたローマの国籍であった。しかし、キリスト信徒たちは天に国籍があるのだと言う。この世ではどこかの国に属しているが、イエスを信じた者は天の国に属し、いずれそこに帰ることが約束されているのである。地上での天の国を表わしているのは教会である。はたして私たちは天の国の素晴らしさ、楽しさを表わしているだろうか。
- * 「そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」（ピリピ3：20～21）再びイエスが来られる時に何がおこるか。それは私たちのからだの主イエスと同じ朽ちないからだに変えられるのである。クリスチャンというのは、キリストが再び来られるのを待ち望んで生きる者である。